

日本人女性の発話におけるアサーティブネス：ノン・アサーティブネスは女性の特徴か、日本人の特徴か？

松村，瑞子
九州大学大学院言語文化研究院言語環境学部門

<https://doi.org/10.15017/2230725>

出版情報：言語科学. 54, pp.27-36, 2019-03-12. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

日本人女性の発話におけるアサーティブネス

—ノン・アサーティブネスは女性の特徴か、日本人の特徴か?—

松村瑞子

1. はじめに

ロビン・レイコフ(1975)(かつえ・あきば・れいのずる訳)(1985: 104-107)は、いろいろな種類の垣根表現を使用すること、断定や質問の発話行為に囲いをして語調を和らげること等、女性は男性よりも種々の場面で断定性(アサーティブネス)に欠けると述べた。しかし、これらの特徴は、女性に限らず男性も含めた日本人の表現形式の特徴とされてきたものである。では、日本人の男女は同様に断定性に欠けているのだろうか。本論文では、先行研究を概観した後、実際の会話における発話行為を分析しながら日本人男女のアサーティブネスについて論じていく。

2. ジェンダーとアサーティブネス：問題の所在

前節でも述べたが、ロビン・レイコフ(1975)が挙げた自己主張(アサーティブネス)に欠ける女性の特徴、即ち垣根表現(well, y'know, kinda, etc.)を使用して自分の言っていることが不確かだ述べている内容が正確かどうか請け合うことができないことを表す、また断定文の前に I guess や I think を、疑問文の前に I wonder を使用して断定や質問の発話行為に囲いをして語調を和らげる等は、女性に限らず男性も含めた日本人の表現の特徴とされてきたものである。日本語のぼかし表現(「なんか」「ちょっと」「ていうか」「みたいな」等)の研究は数多く行われており(中山(1989)、佐竹(1995)、堀尾(2014)等)、これらの表現の使用は日本語に特徴的であるとされている。

王建波(2012)は、日本と中国の医療場面における医者と患者の会話を分析することで、日本人医師は中国人医師よりも、ぼかし表現や断定を和らげる表現(「思います」等)を数多く使っていることを明らかにした。以下はその例である。男性医師であっても、数多くのフィラー、ぼかし表現、断定を和らげる表現(下線部)を使っていることが分かる。

(1) 男性医師 D1 男性患者 P1

10P1 尿のやつを、まだ飲まんといかんですか？

11D1 尿のやつ(0.5)飲んでたほうがいいよ。あのね、「病名」とか年取ってから来てるから、うん、だから、あのー、血圧も一緒ですよ。結局、年齢とともに来てるわけだから。年が若返らないと状態も、「病名」が小さくなるってことは普通はないですよ。うん、だから、そのままにしていた方がいいと思いますね。

(2) 男性医師 D2 女性患者 P7

58D2 一応はね、症状からはね、「病名」の時の典型的な症状ですね。あのう、胃酸のコン

トロールの薬を飲むとたぶん良くなると思っうんですよね。ただね、あのう、その通
りかどうかはね、まずはね、検査をせんとだめと思っいますね。胃の検査をしてい
たかないとですね。『平成 23 年度日本語資料集』pp.2-48。(王建波収集例)

男女に関わらず、これらの垣根表現・ぼかし表現が使われているのであれば、日本人は男女とも同様に自己主張に欠けるのであろうか？

デボラ・タネン(1989)(田丸美寿々訳(1992))も自己主張に欠けると受け取られやすい女性の特徴として、男性であれば直接的に依頼するところを女性は間接的に依頼するため男性には力の欠如と受け取られてしまう、女性は人の話を聞くときに聞いているということを示す信号即ち相槌を発する頻度が男性より高く相手の話聞き手の反応を示していく傾向が強い、沈黙の使用が男女で異なる解釈をされる、女性は頻繁に謝罪を行っているため非力や卑下のしるしと取られてしまう等を挙げる。しかし、間接表現を使用する、相槌を多く用いる、沈黙する、頻繁に謝罪を行う、という特徴もまた、男女を問わず日本語の特徴とされてきたものである。デボラ・タネン(1992: 243-245)自身も「間接表現を重視し、発展させた文化もたくさんある。例えば日本などもその一つで、…、人をちょっと夕食に招待するといった場合にすら、そこには微妙な間接表現のやりとりがある。」と述べ、日本語では男女共に間接表現を用いると述べている。

また、日本人が相槌を頻繁に用いているということは、Clancy (1982)、水谷(1983, 1985)、メイナード(1992)、堀口 (1998) など数多くの先行研究で論じられてきた。メイナード(1992:157)は、日米各 20 組計 120 分の自然会話をデータとして日米会話における相槌の形態と頻度(日本語 871 に対して英語 428)を比較し、日本語会話では米会話の 2 倍という頻度で相槌を送っているという結果を出した。では、日本語ではアサーティブネスに関して男女差がないのであろうか？

鈴木(1997)は、女性語における丁寧さの規則は、女性語だけに当てはまるものではなく、「丁寧さを保つためには、聞き手の領域に踏み込まず、決定権を話し手の事柄に限る」という日本語の丁寧さに関する原則と同じであるとした。日本人の発話行為の方略は女性の方略として一般化されてきた方略と重なるが、「実際に使用される場合には男性と女性は適応される優先順位が異なっている」とした。即ち、「男性は日本語の丁寧さの原則を破ることで親しさ・優位性などを示すという方略をとるのに対して、女性は女性としてのアイデンティティを保つためには、積極的な丁寧さよりも消極的な丁寧さの方を優先させなければならぬ」と述べた。この見解は実際の会話にそのまま当てはまるのであろうか？

そこで、本論では以下の 3 点を中心に考察をしていきたい。

1. 先行研究で挙げられていた女性に特徴的な特徴は、日本語自体の特徴である。
では、日本人は男女共に同じ方略をとるのだろうか？
2. 違いがあるとしたら、それはどこにあるのだろうか？また、その違いはどこから起こるのだろうか？
3. 日本語のアサーティブネスに関する男女差は適応される優先順位で説明できるの

だろうか。

3. 談話分析に基づくアサーティブネスとジェンダー

第2節で述べたように、ノン・アサーティブネスという特徴は、統計だけでみると男女を問わず日本人に当てはまる特徴である。しかし、日本人男女は同様の方略をとるのであろうか、男女の相違はないのであろうか、もし相違があるとしたら、それは適応される優先順位の違いなのだろうか。

三牧(2013)は、談話分析に基づき初対面のコミュニケーションを分析した。その中で、以下のようなジェンダー差を明らかにした。

- ・男性上位者のみに観察された支配的課題管理
- ・男性上位者のみに観察された一方的情報提供
- ・女性上位者の協調的導入質問による課題管理
- ・女性下位者による積極的課題管理

この相違は、タネン(1989)の述べた、女性の会話スタイルの特徴はラポールを重視した親和的スタイル、一方男性の会話スタイルの特徴は地位や序列、独立を重視した競合的スタイルから生じているように思える。本節では、『女性のことば・職場編』『男性のことば・職場編』から反対意見表明の会話例を分析することで、日本語におけるアサーティブネスとジェンダーについて考察をしていく。

まず、会議の場面において、上下関係のある男性、女性がどのように反対意見を表明しているかをみていく。

以下は男性同士の会話であるが、断定性を弱めながら意見を述べていることが分かる。

(3) 会話例6 23A 男 40代大学教授・23I 男 60代大学教授・23B 男 50代大学教授

23I2341: たとえばあの、ほかの研究室でね↑、あの一、演習室にそうゆう設備があるのに、
[研究室名]だけないってゆうのは不公平感が。

23A2342: いやあの一、ほかんところはあんまり入ってない、と思いますね一、あの一ちゃんとよくわかんないんですけど。

23I2343: →はいってない、じゃー。←<笑い 不明男>

23B2344: 書道科ぐらいですよ、入っているのは、書道科。

23I2345: →あ、そうですか←

23Iの「たとえばあの」「あの一」のように躊躇いがちに述べた意見に対して、23Aは反対意見を述べているが、「いやあの一」「といます」「あの一ちゃんとよくわかんないんですけど」のように断定性をかなり弱めて発言している。さらに、23Bも「書道科ぐらいですよ」と23Aの意見に同意をしたため、23Iは自らの意見を引っ込めた。日本語の男性の発話にも、このような断定性の低いものが多い、

しかし、男性同士の会話の中では、取り分け上下関係がはっきりしている場合に、男性

上位者が直接的に意見を述べるものも見られた。

(4) 会議の場面 29A 男 50 代会社経営者・29G 男 20 代主任 29A は 29G の上司

29A5953: 次回からではなく、主要店舗の一、うちが一、...わかるためにはどうしたらいい
のか、そういうことが大切じゃないんですか↑

29G5954: はい。<間 10 秒>

29G5955: えー、えーと今現在、そのメールってゆう話が出ました...その、店舗のかたを
です、メールアドレスを、あの一、確認できるような###を、していただけれ
ばなああと##。<間 3 秒>

29A5956: いや、現在でもわかってんじゃないの↑

29G5957: あの一、ショッ。

29A5958: ただ[自社名]として一、そうゆう意識を持って、てん、主要店舗の一、担当者の
一、その担当者リストっていうのが一、こしらえてないだけじゃないの↑

29A5958: そうです。

会話(4)は、上下関係のある男性同士の会話である。29G（下位者）が、出張の報告の中で、各店舗の担当者に関する情報が少ないから、店舗の担当者のメールアドレスを集めた方がいいと提案しているが、29A（上位者）は、担当者のメールアドレスがあるから、もう一度収集する必要はないと言っている。波線の下位者 29G は丁寧体で、「えーと」「あの一」のようなフィラー、「していただければなああと」のように授受表現や言いさし表現を用いて、間接的に意見を述べているのに対して、上位者 29A は、下線部で普通体を使い、上り音調で和らげてはいるものの、「じゃないの」のような砕けた表現を用いて、直接的に反対意見を述べていることが分かる。上下関係がある場合は、男性下位者は断定性を弱めているが、男性上位者は普通体を用いて直接的に意見を述べていることが分かる。

次は、会議場面における、女性同士の会話である。

(5) 会議の場面 14A 女 33 歳会社員・14B 女 52 歳社長 14B は 14A の上司

14B8897: それとあと[名字]さんが一、アップでやるのを、(ええ)1時間半のものを(ああ、ええ)開発してほしいと。

14A8998: 1時間半ってゆうのは1時間半動きっぱなしってゆう感じなんですか↑

14B8999: そう。

14A9000: あー

14B9001: だから、あの一。

14A9002: →<笑いながら>死ん←じゃうんじゃないの、みんな。<笑い>

14B9003: →死んじゃわない←と思うけど、でもほらおばあさんたちがやるから、あ、おばあさんったら悪いけどさ。

14A9004: →<笑いながら>おばあさんたち。←

14B9005: まー、ゆってみれば年齢層が高い人たち(えーえーえーえーInf (女))がやる、あれだから、(はい Inf (女)) そんなになにも、あの、大きいものじゃないでしよ。

14A9006: そう★ですね、そうですね。

14B9007: →激しいものじゃない。←

会話(5)は、女性の社長と社員の会話である。上位者である14B社長が1時間半ものを開発してほしいということを伝えているが、下位者である14A会社員は、先ず14A8998で情報を求め、次に14A9002で「死んじゃうんじゃないの、みんな」と笑いながら冗談を言うことで反対意見を出している。それに対して、14Bも下線部の発話で14Aの冗談に「死んじゃわないと思うけど」と反対意見を述べ、さらに砕けた表現を用いて「おばあさんたちがやるのだから大変なものであるはずはない」と14Aを説得しようとしている。ここで収集したデータでは、女性の場合は、上司であってもあまり直接的な表現をするものは見つからなかった。また、鈴木(1997)の議論とは異なり、親しい関係であれば、女性下位者が取り分け女性上位者に冗談など積極的な方略を使っている例も見つかった。

次は、会議場面における男性上司と女性社員の例である。

(6) 打ち合わせの場面 13G 男 50歳購入課次長・13A 女 24歳会社員 13Gは13Aの上司

13G7517: ちょいとさー

13A7518: はい。

13G7519: 手数かけちゃうけどー、直接電話しちゃってよ。

13A7520: はい。

13G7621: これ、間違ってるといっちゃうとー、悪いもん。

13A7522: あっ、これー、じゃ、もう、なんにもいわないとー、来月からこのまんまー、できちゃ、てしまう。

取引先の請求書について話し合っている場面である。男性上位者13Gは「これ、間違っているといっちゃうとー、悪いもん。」と言う理由で、女性下位者13Aに普通体の非常に砕けた表現「手数かけちゃうけど、直接電話しちゃってよ」を用いながら、指示を出している。それに対して、女性下位者13Aは、それだと来月から困る事態になるということを伝えることで、間接的に「間違っているということを伝えるべきだ。」という反対意見を述べようとしている。会話(4)の場合と同様、男性上位者は直接的表現を用いることがある。

以下も、男性上位者と女性下位者の会話である。

(7) 朝打ち合わせ場面 19A 男 50代大学職員・室長 19J 女 40代大学職員 19A(上位)、19J(下位)

19A496: きょう 10 時半からの臨時教授会は出なくていいね

19J497: はい。<間 5 秒>

19J498: \$ ### 資料は、###。

19A499: あー、いいんじゃない、教授会は、臨時教授会だから。

19J500: \$ ## しかないんで、#####。

19A501: うちには、だって、学生、関係ないでしょ、基本的に。

19J502: はい、特に。

19A503: 教授会資料につけとけばいい。

19J504: \$ #####。

19A505: あの一、各学部教授会資料にはついてますから、あとであげるけど。

19J506: あー、そうですか。

上位者の男性 19A が、下線部で「自分は教授会にでなくてよい」という意見およびその理由を直接的に述べている。それに対して下位者の女性 19J は、「はい」と答えたが、資料の問題などを出して反対意見を仄めかすが全く取り合ってもらえず、最終的に「あー、そうですか。」と自分の意見を引っ込める。

基本的には、日本語の会話では間接的に意見を述べるものが多かったが、会話(4)(6)(7)に見られたように、男性上位者が下位者に対して反対意見を直接的に述べる例もしばしば見られた。それに対して、女性上位者では、下位者に対しても直接的に意見を述べることは少なかった。

雑談場面でも、女性と男性では断定性について相違がみられた。

(8) 昼食時雑談場面 03A 女 34 歳会社員・03H 女 23 歳会社員 03A(上位)、03H(下位)

03H958: [名字]さん、今オーストラリアですよ。

03A958: ねえー。

03H960: 2 しゅう、1 週間ですよ。

03A961: 1 週間じゃな。

03H962: じゃあ、来週の月曜日には来るんですよ。

波線部の下位者 03H は、親しい口調で[名字]さんに対する羨ましい気持ちを直接表現しているが、丁寧体はくずしていない。一方、上位者の 03A も下線部で「ねえー」と同調する気持ちを表しているが、こちらは普通体の砕けた表現を使っている。上下を意識しているが、和合の気持ちが表れている。

以下は男性同士の雑談場面である。

(9) 朝雑談場面 25A 男 40 代支配人・25B 男 50 代総支配人 25A(下位)、25B(上位)

25B3348: あー。

- 25B3349: じゃー、[名字]に一、ゆっとい、ゆっといてよ。
- 25A3350: いや、ポラロイドとか、ゆっていませんでした↑
- 25B3351: いや、あいつは一、結局デジカメにしたいとかなんかゆってた。
- 25A3352: あー、デジカメにしたいと一↑
- 25A3353: あー。
- 25B3354: ま、ポラロイドを使っても、あれはいいんだけどー。
- 25B3355: 今、安いやつがあるんだから。
- 25A3356: そしたらー、そしたら至急買ってくれたらいいんだよね一↑

上位者 25B が「ゆっといてよ」と指示すると、下位者 25A は、「いや、ポラロイドとか、ゆっていませんでした」と反論する。さらに、それに対して上位者 25B は「いや、あいつは一、結局デジカメにしたいとかなんかゆってた。」と 25A に対して反論し返す。その後も、意見を言い合う。

次の会話は、男性 2 名と女性 1 名の雑談場面である。

- (10) 休憩場面 35A 男 20 代図書館員・35B 女 50 代図書館員・35J 男業務主管 35A(下位)、35B (中位) 35C (上位)

35J9038: ま、台風、そうかハリケーンてゆうのも台風の目みたいなものあるんだろ↑

35A9039: うん、ありますね、そりゃー。

35J9040: あれも同じものでしょ↑、名前が違うだけで。

35B9041: うん。

35A9042: 規模とあれはぜんぜん違いますけどね<笑い>。

35J9043: 違う違う、原理が。

35A9044: あ、原理はいつしよです。<間 5 秒>

上位男性の 35J は台風とハリケーンは同じものだという意見を述べる。それに対して、女性 35B は「うん」とだけ答えて賛同している。一方下位男性の 35A は「うん、ありますね、そりゃー」と同意はするが、「規模とあれはぜんぜんちがいますけどね」と異なる部分を付け加えたり、35J の「違う違う、原理が」に対しては、「あ、原理はいつしよです」とはっきりと反対意見を述べる。そのため、5 秒間開くことになる。

これらの会話例から分かるのは、日本語では男女とも間接的に意見を述べるものが多いのであるが、上下関係が断定性に影響を与えており、男女に関わらず下位者は間接的に意見を述べること、上位男性については直接的に意見を述べることもあるということ、男性については上位・下位に関わらず競合的な方略を用いることがあるということである。

4. ノン・アサーティブネスは日本人女性の特徴か、日本人の特徴か?

第2節で立てた3つの疑問点については、本稿で分析したデータからは、以下のような結果を得ることができた。

1. アサーティブネスに関して、日本人は男女共に同様の方略をとるのだろうか？
 - ・日本人男女は間接的に意見を表明する傾向があった。それ故、アサーティブネスに関しては、いずれも断定性があまり高くないという点は類似していた。断定性の低さは日本人女性のみならず、日本人男女に当てはまる特徴であると考えられる。
 - ・また、男女に関わらず日本人は、下位者は上位者に対して、丁寧体を基調として、断定性を和らげる話し方をしていた。
 - ・ただし、2で挙げるような相違が見られた。
2. 違いがあるとしたら、それはどこだろうか？
 - ・上位男性の場合のみ、下位男女性に話すときに直接的表現を使用する例が複数見られた。
 - ・女性の場合、上位者・同位者のみならず下位者であっても、冗談を言って反対意見を表明する等の積極的なボライトネス・ストラテジーを用いながら反対意見を表明する、という例が見られた。これは、鈴木(1997)の述べた「女性は女性としてのアイデンティティを保つためには、積極的な丁寧さよりも消極的な丁寧さの方を優先させなければならない」とは異なる結果となった。
3. またその違いはどこから起こるのだろうか？
 - ・女性の上位者は下位者に対しても直接的表現を用いることは少ないこと、女性下位者は親しい関係であれば積極的方略を使うこと、男性上位者は下位者に対して直接的表現を使うことがあることは、タネンの述べる男女差、男は「地位」で話し女は「和合」で話す傾向が強いという違いとも関わっているのではないかと推測できる。

5. おわりに

本稿では、女性の言葉の特徴とされた、いろいろな種類の垣根表現を使用すること、断定や質問の発話行為に囲いをして語調を和らげること等が、女性に限らず男性も含めた日本人の表現形式の特徴とされてきたものであることから、日本人の男女は同様に断定性に欠けているのだろうか、また断定性について、日本人にはジェンダー差がないのだろうかという点について、職場でのデータを分析することで議論した。その結果、日本人は男女共に断定性が低いという特徴をもつが、男性上位者のみが下位者に対して直接的表現を用いていたこと、女性上位者は下位者に対しても同位者と同様の方略を使っていたこと等から、タネンの述べる「女性は和合で話す男性は地位で話す」という特徴があることが、示唆された。この結果は、三牧(2013)が初対面の会話において見られたとしたジェンダー差にも通じるものである。しかし、ここで用いたデータは限られており、このことを証拠立てるには、さらなるデータ分析が求められることになる。それについては、今後の課題と

したい。

参考文献

- Clancy, Patricia (1992) "Written and spoken style in Japanese narratives," Deborah Tannen (ed.), *Spoken and written language*, 55-76. Norwood, NJ: Ablex.
- Lakoff, Robin (1975) *Language and Women's Place*, New York: Harper and Row. [かえ・あきば・れいのるず訳 (1990) 『言語と性：英語における女の地位 (新訂版)』有信社]
- Okamoto, Shigeko (2004) "Ideology in Linguistic Practice and Analysis: Gender and Politeness in Japanese Revisited," *Japanese Language, Gender, and Ideology Cultural Models and Real People*, Oxford: Oxford University Press, 38-56.
- Miller, Laura (2000) "Negative Assessments in Japanese-American Workplace Interaction," *Culturally Speaking: Managing Rapport Through Talk across Cultures*, London, New York: Continuum, 240-254. [浅羽亮一監修(2004) 「日本人とアメリカ人は職場で相手への否定的評価をどう伝えるか」『異文化理解の語用論』東京：研究社、113-133.]
- Suzuki, Toshihiko (2007) *A pragmatic approach to the generation and gender gap in Japanese politeness strategies*, Tokyo: Hituzi Shobo.
- Tannen, Deborah (1989) *You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation.*, New York : William Morrow. [田丸美寿々訳(1992) 『わかりあえない理由』講談社]
- 阿部圭子(1997) 「フェミニスト人類学から見た異文化における女性語」『女性語の世界』明治書院, 231-239.
- 井出祥子、堀素子、川崎晶子、生田少子、芳賀日登美 (1985) 『女性の敬語の言語形式と機能』文部省科学研究費研究成果報告書
- 井出祥子 (1997) 「女性語の世界—女性語研究の新展開を求めて—」『女性語の世界』明治書院, 1-14.
- 現代日本語研究会編 (1997) 『女性のことば・職場編』東京：ひつじ書房.
- 現代日本語研究会編 (2002) 『男性のことば・職場編』東京：ひつじ書房.
- 佐竹秀雄 (1995) 「若者言葉とレトリック」『日本語学』14(11)明治書院, 53-60.
- 鈴木睦 (1997) 「女性語の本質—丁寧さ、発話行為の視点から」『女性語の世界』明治書院, 59-73.
- 中山治 (1989) 『「ぼかし」の心理—人見知り親和型文化と日本人—』創元社
- 堀尾佳以(2014) 『若者言葉にみられる言語変化に関する研究』九州大学大学院芸術工学府博士論文
- 堀口純子 (1998) 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64号、13-26
- 松村瑞子・因京子 (2001) 『平成10年度～平成12年度科学研究費補助金 (基盤研究(C)(2))

研究成果報告書：日本語の談話におけるスタイル交替の実態とその効果についての分析』

松村瑞子・李曦曦（2012）『平成 23 年度 日本語資料集』九州大学大学院比較社会文化学
府

松村瑞子（2001）「日本語の会話に見られる男女差」『比較社会文化』第 7 号,九州大学大
学院比較社会文化学府, 69-75.

_____（2013）『日本語のポライトネス—異文化理解教育の方法開発に向けて—』九州大学大
学院芸術工学府博士論文

三牧陽子（2013）『ポライトネスの談話分析 初対面コミュニケーションの姿としくみ』東
京：くろしお出版

水谷信子(1983) 「あいづちと応答」『話し言葉の文法』水谷修編、37-44, 東京：筑摩書房

_____（1985）『日英比較 話しことばの文法』東京：くろしお出版

メイナード・K・泉子（1992）『会話分析』東京：くろしお出版